

ふいーらむ・F

16

Feb.2023

福島県民俗学会

<http://fukushimafolklore.jimdo.com/>
fukushima_folklore1971@yahoo.co.jp

第38回東北地方民俗学合同研究会 山形大会

第38回東北地方民俗学合同研究会が3年ぶりに対面で開催されました。福島県民俗学会が当番になっていた2021年は延期、2022年（令和4）は、初めての試みとして福島県民俗学会主催のオンライン開催となり、今年度担当する山形県での合同研究会は、2020年（令和2）の宮城県（東北民俗の会）以来の対面で開催することができました。しかしコロナの第8波のなかでの開催となり、担当する山形県民俗研究協議会にご苦勞も多かったと思いますが、実り多い会になりました。

2022（令和4）年11月5日（土）、山形市市民活動支援センター（山形駅西口霞城セントラル23階）を会場にして開催されました。主催は山形県民俗研究協議会と村山民俗学会です。今回のテーマは「伝統的農法の民俗」。福島県民俗学会からは小澤弘道さんが「伝統的農法とソバ栽培試験について—喜多方市山都町の例」というタイトルで基調報告をしました。

主催団体（山形県民俗研究協議会）の岩鼻通明会長による開会の挨拶に続き、庄内民俗学会の渡辺理絵氏の基調講演がありました。

「伝統的農法の民俗」というテーマは、高度経済成長期以降、食文化が大きく変化する中でかつての伝統的農法が存亡の危機を迎えており、伝統的農法継承や古老からの聞き取り調査は喫緊の課題になっている。伝統的農法に関する東北各県の調査研究の現状の情報を交換



東北地方民俗学合同研究会山形大会の基調講演と資料集（右）

することによって、コロナ後を見すえた新たな民俗研究や、連携の在り方を探りたいというものでした。

●基調講演 渡辺理絵（庄内民俗学会・山形大准教授）「東北・山形県庄内地域に生きる焼畑文化」

1972年に刊行された佐々木高明『日本の焼畑』は、我が国におけるそれまでの焼畑研究を総括するもので、その後の焼畑研究の大きな指針とされてきた。渡辺氏はこれを起点として山形県鶴岡市の温海地域などの焼畑習俗の詳細な調査を続け、東北地方における焼畑は佐々木の指摘した分類とは別な切り口で把握できることを指摘した。とくに現代にも継承されている温海地域の焼畑の形態は、かつての農法と異なりモノカルチャー化し、焼畑の休閑期間も短縮しており、焼畑の立地場所が山から里へ下りていることなど、興味深い分析をしている。この地区で栽培される温海カブの加工法の甘酢漬も1970年代に商品化されたものであった。現行の焼畑を改めて検討し、過去との連続性と非連続性を明らかにすることにより、伝統的な農法を新たな時代に生かすことができるのではないかと指摘した。

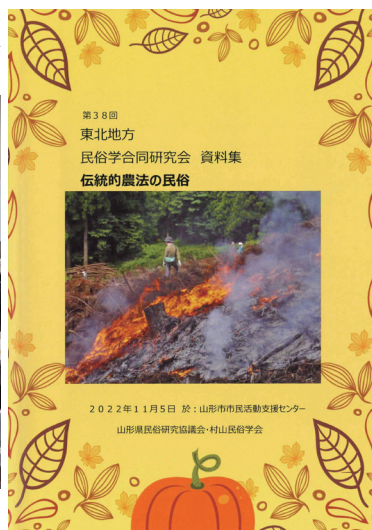
①「伝統的農法とソバ栽培試験について—喜多方市山都町の例」 小澤弘道（福島県民俗学会）

発表者は、喜多方市山都町でソバの試験栽培事業の経験

を踏まえながら、ソバとソバ食を通して山間地農業の振興に取り組んだ経緯をもとにして、会津地方の伝統的なソバや伝統作物の栽培、山間地と平地との交流などについても話をした。

②「農法としての『虫祭』の考察」 齊藤壽胤（秋田県民俗学会）

作物の病害虫を避ける除虫や殺虫の方法として、信仰的祭事や呪術的の神事が知られている。齊藤氏は秋田県をはじ



めとする東北各地の「虫祭」の儀礼を紹介しながら、な超自然的なものに働きかける儀礼や信仰も、作物栽培の蓄積された農法とみなす必要があると述べる。

③「野焼き」について 古川 実（青森県民俗の会）

原野を開墾して畑や放牧地化する「野焼き」は、上北地方で昭和30年代まで行われていた技術であった。上北町歴史民俗資料館建設に際して、制作された「野焼き」の映像記録を通して「野焼き」の工程を紹介し、開墾や開発を支えた技法として捉え直すことを提言した。

④「岩手の伝統農法」 佐藤 優（岩手民俗の会）

下閉伊郡岩泉町安家地区に行われていた焼畑の技法を紹介しながら、こうした村落は経済的に困窮し、古風な生業を墨守していた村落と一面的な捉え方を批判する。歴史や社会の変化を能動的に受け止める過程で、生業として必然的に「焼畑」が選択されたと結論づける。

⑤「大島カブの栽培の現状と伝統農法」 小野寺佑紀（東北民俗の会）

気仙沼市大島で栽培されている在地の蕪「大島カブ」に関する報告であった。生産力も低く飢饉や凶作に襲われてきた大島では、貴重な救荒作物とされ、間食としても重要な食糧であった。また海藻やヒトデ、ウニの殻を肥料として用いるなど海との関係の指摘も面白かった。



小野寺氏が持参した大島カブとカブの種子

●総合討論 岩鼻氏の司会で質疑応答がすすめられ、17時30分に会を閉じた。

幅広いテーマであったためか、今回も各県の発表の内容は多彩で、充実した内容でした。共通テーマは総括して結論づけることはしない、というのがこの会の方針ともいえるものです。参加者は発表内容を受け止め、持ち帰って何らかの形で研究に生かしてもらえればよい、というのがこの会の趣旨といえると思います。

●閉会のあいさつ、次年度テーマ 次年度（令和5年度）の開催は秋田県で、テーマの提示がありました。「コロナ禍と民俗」です。

●懇親会 18時から 久しぶりの懇親会でした。懇親会は山形駅前の居酒屋で開催され、各県からの出席者が近況を報告しながら親交を深めました。

東北地方民俗学合同研究会は研究発表に限らず、懇親の場での情報交換が大変重要で、主催者に感謝しながら大いに盛り上がりました。（岩崎）

● 持ち回り研究会 in 棚倉町

今年度の地域持ち回り研究会は中通りで、2022（令和4）年12月10日棚倉町を会場に行われた。

例年よりも遅い開催時期であったのは、棚倉町の八槻都々古別神社の霜月大祭に合わせたためである。

都々古別神社の神楽見学 当日9時30分に八槻都々古別神社前の駐車場に集合し、会員でもある棚倉町教育委員会の藤田直一氏の案内で霜月大祭の都々古別神社の神楽を見学した。あいにくコロナ禍のもとの祭礼であったため、大祭も関係者だけで行われることになっていたが、藤田氏の特別な計らいで拜殿で奉納する神楽を見学することができた。

県指定無形民俗文化財の「都々古別神社の神楽」は、国指定重要無形民俗文化財の御田植とともに神社の社家によって継承されている芸能としてよく知られている。今年の霜月大祭の神楽は神事に続き、10時30分から巫女舞、諏訪鹿島などの演目が奉納された。



八槻都々古別神社の神楽

八槻家住宅見学 午後からは藤田氏の案内で、八槻都々古別神社の宮司宅であった「八槻家住宅」（福島県指定重要文化財）を見学した。書院棟と主屋棟に分かれており、厚みのある茅葺の書院棟は江戸時代中期に建設されたものといい、随所に細かな装飾があしらわれた凝った造りがよく分かった。見学のあと管理棟に移動し、藤田直一氏の「棚倉町に歴史文化基本構想と文化財の現状」という研究発表があった。

研究発表 藤田氏は平成31年3月に「棚倉町歴史文



八槻家住宅書院棟見学

化構想」取りまとめを担った行政側の担当者で、まとめの過程についての話をうかがった。文化財担当の人材はどの市町村でも豊富とはいえない。そうしたなかで棚倉町を訪れる研究者や学生の力を借りて基礎調査を行い、形にしていった手法は高く評価できる。また、文化の中継点に棚倉町が位置するという発想を軸に、多彩な文化財でストーリーを構成したという。「保存活用計画の策定」(平成 29、令和 3)、「歴史的風致地区維持向上計画の策定」(令和 2)を実施し、今は整備基本計画に着手している。幅広く人材と知恵を集めようとする試みや、指定未指定に限らず、町内の文化財の多様な価値を引き出そうとする藤田氏の姿勢に、改めて担当者の意識の高



藤田直一氏の研究発表

さの重要性を強く感じた。(岩崎)

平成 4 年度第 2 回幹事会

終了後棚倉町の会場で開催した。今年度の経過報告に続き、次の点について話し合いを持った。

●令和 5 年度大会・総会について

2023 (令和 5) 年 6 月 4 日 (日)。コロナ禍も勘案し会場は福島県立博物館で考える。

●第 38 回東北地方民俗学合同研究会についての確認(山形県で実施)、発表者は小澤弘道会員。

●編集=『ふーらむF』16号は岩崎真幸が編集担当。『福島の民俗』51号の原稿募集と刊行。

●来年度助成金の申請についてなど

note から ひねり餅

我が家では例年 11 月の中旬に岩手から蔵人さんたちがやってきて、酒造りが始まります。

酒(日本酒)は先ず白米を洗米浸漬し、翌日朝これを蒸して、麴にしたり、仕込みに使ったりして醸造を行ないます。

この蒸米の出来がその後の作業や酒質に大きな影響を与えるため、蒸米の硬軟、手触りなどが大切になります。これを見るのに蔵人は熱々の蒸米を少し手にとって、指先や手のひらで捻り潰して蒸し具合を確認する事があり、この潰した蒸米を“ひねり餅”と呼びます。通常は蒸米の確認であれば指先で摘んでひねる程度の物ですが、時には直径 15cm ぐらいの円盤形(ピサ生地形)のひねり餅を作る場合があります。これは蔵人や酒屋の主人方の軽食になりました。

この大きなひねり餅を作るには幅約 20cm、長さ 1 m ぐらいの樫の厚板を床に立て、腹で押さえてしっかり固定し、蒸米を両手で纏めつつ掌底に前身の体重を掛け押し潰します。通常の餅と違って粳米を使っているの、堅い上に熱くないと纏まり難いのでとても力の要る作業で、慣れないと掌の皮が剥けるほどといわれています。

また、器用な蔵人さんは瓢箪や縄などを象った“細工物”も作っていました。

出来たひねり餅は、その場で食べないですぐ堅くなるので新聞紙に包んで保存し、食べる時はストーブの上で軽く焦げ目の付くまで炙り、醤油を塗り、ハサミ等で切って頂きます。焼き餅と煎餅の中間という感じで、あっさりしてとても素朴ですが、滋味深く、自分は今でもこれに優るおやつはないと思っています。ただ、今では大変さもあって、蔵人さんが大きいものを作ることはなくなりました。それでも自分は仕込み途中、一掴みぐらいの蒸米で拵えて季節の味を噛み締めています。

さて、ひねり餅には醤油をつけて食べるのですが、以前、会津若松の蔵元さんが「ひねり餅に味噌付けて喰ったらうめえべなあとと思うげんちょな、火事になっから味噌付けるもんじゃねえと、ばあさんにいわっちゃ」と仰っていました。言われてみればウチでも味噌は付けません。何かしらの禁忌があるのでしょうか？(名)四家酒造店 代表社員 四家久央





ただみ・モノとくらしのミュージアム の開館

学芸員 原永円香

福島県只見町に「ただみ・モノとくらしのミュージアム」がオープンしました（以下ミュージアム）。国指定重要有形民俗文化財「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」2,333点を収蔵・展示するために、博物館法に基づく公立博物館として、只見町が設置しました。民具収蔵庫を新設し、展示館を併設しています。民具収蔵庫は収蔵したまま展示する収蔵展示として公開しており、職員立会いで見学が可能です。また、みんぐふれあいホールという体験コーナーでは、町収集民具に触れたり、仕事着を着て記念写真を撮ったりすることができます。また展示ホールの展示台やガラスケースは可動式で、企画展ごとに配置を変えることができます。第1回企画展として「開館記念展 会津只見は民具がいっぱい！1万点」を開催しました（現在も縮小して展示中です）。国指定のコレクションから281点を選出し、コレクションの全容を紹介しました。また、展示した民具はクリーニング等を行ない、使用されていた当時の状態の再現を試みました。

只見町の民具は民俗学・民具学界では「只見方式」として名が知られています。「只見方式」とは、民具の収集、クリーニングから調査カードの記入に至るまで、町民の手によって行われた一連の作業を指しています。1965年から公民館事業として民具収集を開始し、1989年には町史編纂事業にともない、民具整理が事業化しました。また1998年からは国指定を目指し民具の記録・整理を開始し、5年後の2003年に2,333点の民具が国指定重要有形民俗文化財となりました。以上のように只見町の民具収集及び整理の歴史は50年以上にわたる長いもので、国指定からも20年近く経る中で、収蔵展示施設が構想されながら、それを実現するのが遅れていました。

今回、国指定民具の収蔵庫を新設するとともに、既存の旧会津只見考古館を改修した展示館を併設して、新しいミュージアムの開館となりました。今後、民具収蔵（展示）庫はそのまま常設展の役割も果たせるよう、展示キャプションや解説パネルの増設を進めています。また、このミュージアムは只見町にとって初めての博物館法に基づく公立博物館です。民具のみならず、只見町の民俗・考古・歴史・美術等のさまざまな文化遺産の調査、研究を行ない、展示や収集保存に反映していきたいと考えています。

筆者は2022年4月から地域おこし協力隊員として只見町に移住し、ミュージアムに勤務しています。只見町



新設された収蔵庫の内部

の文化と自然に初めてふれ、“外から見た只見町”という新鮮な感覚も持ちつつ、町の文化の調査、研究をしていきたいと考えています。



古い写真から
ホトケボ

ランバ（墓地）に立てられたホトケボ。三十三回忌供養の際に、生のクリ丸太の一面を削って戒名を下書き入れて墓地に立てる。この異形塔婆をホトケボと称した。1972年ころ相馬郡飯館村内で撮影。現在ではすでに忘れられてしまった習俗である。

（岩崎真幸）



▼新型コロナはようやく落ち着いてきましたが、収束したわけではないですね▼災害に見舞われ続けたここ十数年、日常生活の脆さをこれほど実感したことはありません▼面白い習俗についての投稿が四家会員からありました。こうした情報に期待します▼只見町に新しい博物館がオープンしました。圧倒される数の民具が展示されており、原永さんからその紹介記事をいただきました。原永さん大いに活躍してください▼今年度のふおらむの刊行は2度でしたが、来年度は刊行を増やしたいものです（い）

福島県民俗学会通信誌『ふおらむ・F』16号
2023（令和5）年2月28日発行

編集・発行：福島県民俗学会（会長 岩崎真幸）

福島県会津若松市城東町1-25 福島県立博物館

内（〒965-0807）事務局：内山大介

通信誌編集：岩崎真幸、丹野香須美、内山大介